ISSN 0388－5569
VOL. 13 No. 1
（通巻37号）
1992. 2

Library News

山口大学附属図書館報

目次

山口大学附属図書館蔵の角筆文献　小林芳規 … 1
不幸せな辞典　大庭平四郎 … 3
図書館ライブ③　逐次刊行物 …… 5
「雑誌記事索引データベース」及び「国会図書館科学技術欧文会議録データベース」 …… 5
寄贈図書 …… 6
来館者 …… 6
日誌 …… 6

山口大学附属図書館蔵の角筆文献

広島大学文学部教授　小　林　芳　規

此の度、山口大学附属図書館の蔵書の中から、角筆文献が50点、計230冊発見された。同図書館関係各位の御厚情を賜り、毛利就挙公寄贈書並びに明倫館旧蔵書等の調査を、平成３年８月から平成４年１月にかけて行った成果である。この調査は、山口市域の角筆文献調査の一環として行われ、広島大学大学院文学研究科の柚木靖史・豊田尚子・藤田夏紀・岡野幸夫の諸君の尽力に成るものである。

角筆文献とは、角筆という古代の筆記具で紙面を凹ませて文字や絵などを書いた古文献をいう。近年発見され始めた新しい文献群である。

角筆は、箸一本の形で長さは24cm余を基準とする。象牙又は竹又は木で作り、一方の先端を削りとがらせ、この先端を古代紙の紙面に押しあて紙を凹ませることによって、文字や絵を書いた。角筆の遺物として、今日までに次の５種が発見されている。

象牙製角筆	１管	三重県桑名市鎮国守国神社蔵
竹製角筆	１管	東京国立博物館蔵
木製角筆	１管	広島県三原市御調八幡宮蔵
竹製角筆	11管	京都大覚寺蔵
竹製角筆	２管	東山御文庫蔵

これらは、いずれもその先端が使い古されていて、紙面を押し凹ませて文字などを書いたことをうかがわせる。中でも、御調八幡宮の木製角筆と大覚寺蔵の竹製角筆は、先端が割れてブラシ状に立ち上り、その隙間に古代紙の繊維を多数付着させていたことが顕微鏡で判明し、古代の筆記具であったことが証明された。江戸時代の学者は、「漢籍の句読を人に授ける際に、書中の字を指すのに用いるもの」と大方が説き、「字さし」「字突」の俗称まで作り出していた。角筆文献の存在そのものにも全く気付かなかったのである。

角筆文献は、30年前の昭和36年に第１号（高野山大明王院蔵の漢書周勃列伝、平安中期10世紀の書入れ）が発見されて以来、平成４年２月の現在までに全国から643点が発見されている。紙本で最も古いのは、奈良時代の正倉院文書（天平勝宝元年、藤原仲麻呂牒）であり、最も新しいのは明治11年刊の木版本「劉向列女伝」（広島大学蔵）であって、この間の平安時代・鎌倉時代・室町時代・江戸時代の各時代にわたっている。

木簡の板面を凹ませて書いた文献もあり、木簡では奈良時代の平城京出土だけでなく、溯って藤原宮跡から出土した木簡にも、角筆の文字の書入れがある。中国大陸では、2000年前の漢代の木簡に角筆の書入れを発見し、角筆の源が

中国にあることが分った。近時、ネパール出土のチベット経典にチベット文字を角筆で書入れた文献も発見され出した。

わが国における角筆の使用地は、京都や奈良の古代文化の中心地は言うまでもなく、北は青森県弘前市（稽古館版）から南は九州の佐賀県（宋版大般若経）にわたり、日本の各地に及んでいる。角筆が、古代の筆記具として、毛筆と共に全国的に使われたことを考えさせる。

角筆で書かれた文献の内容は、漢文の訓点として書き込まれたものが多いが、それ以外の内容の文献も次々と発見されている。『伊勢物語』の鎌倉時代の古写本に、その注釈などを口頭語で行間に角筆で書入れたもの、紙背の白紙に10行程の漢文の文章を書いたもの、角筆で書いた鎌倉時代の手紙、鎌倉時代の片仮名交り文、宋版（思渓版）『大般若経』の527帖にわたって、表紙や本文中の余白などに、角筆で鎌倉時代の年月日、北九州の寺社名、その関係僧名（50数名）その時々の感慨の文言、連歌資料や絵など多数を書入れたものなど多様でもある。

角筆の文字は凹みであるから目立ちにくく目に訴えることが弱い。従ってメモに適する。その意味では今日の鉛筆の働きに似ている。鉛筆で書いた文書が公的な文章や証文にならないように、角筆で書いた文献も証拠として残される意図はなかったであろう。あくまでも一時的であって将来にわたって長く保存されることも意図されず、私的である。

角筆のこのような特性は、言葉の上に強く現れて来る。毛筆の文献では、文字表現するに当り、その定まった言語上の慣習や伝統に伴うきまりが、その表現を大きく制約して来るが、角筆の文献では、文字表現である以上、何らかの制約はあるものの、その慣習やきまりの埒外にある言語事象が現われたり、言語の歴史的な変化の結果が、毛筆文献に比べて、角筆の方にいち早く現われたり、俗語が投影されたりする。これらは、要するに言語における〝日常性の露呈〟と深くかかわることであり、そこに、古代語の口頭語がうかがわれる。古人の生き生きした生活まで見えて来る。

山口大学附属図書館から発見された、50点の角筆文献は、いずれも江戸時代の木版本で、その漢文本文の漢字句を判読したり注解したりするために、その行間や上欄外などの白紙部分に角筆で紙面を凹ませて、仮名や漢字などを書入れたものである。その蔵書の内訳は、

毛利就挙公寄贈書から	8点、計49冊
周防国明倫館旧蔵書から	6点、計28冊
明倫館旧蔵書から	10点、計86冊
山根信太郎氏寄贈書から	18点、計38冊
景山家文書から	3点、計14冊
その他	5点、計28冊

のようであり、漢籍が45点、国書が5点である。漢籍は、寛文4年板の[首註]春秋集註をはじめ明治3年再刻の十八史略まで、易経・書経・詩経・春秋左氏伝・禮記・論語・孝経大義・孝経新註・大学・中庸・史記論文・漢書評林・後漢書・宋名臣言行録・資治通鑑・孟子・文選六臣註・文選正文・古文真宝後集・近思録・小学・蒙求等に広くわたっている。国書は、皇朝史略・日本外史補・皇朝戦略編・赤穂四十七士伝であるが、この種の国書に角筆の書入れが認められたのは初めてである。

角筆の文字は、墨書や朱書と異なって色が無く凹みであるから目に着き難く、その上、長い年月の間に凹みも薄くなっているので一層読解することが難しい。このために本館蔵の角筆文献もその存在が今まで気付かれずに今日に至ったものと思われる。

今回の調査で読解することが出来た角筆文字について、学術上、特に国語学の上からその資料価値について若干述べてみる。

角筆の文字は、先に述べたように、毛筆の文字が表記規範に拘束されるのに対して、凹みであるためにその規範の埒外の現象が表われ易い。当時の訓点としては片仮名を用いる規範があるが、本館蔵の角筆の訓点に「仁（ひと）」「興（をこる）」（寛政年間板論語）や、「不干経」の上欄に角筆で「つねにをいてせ（ず）」（江戸後期板大学）など平仮名を使っているものがあるのは、その一例である。

又、発音に、当時の訛った音が現われるのも角筆文字の顕著な特徴である。例えば、毛利就挙公の寄贈書の中に、「搖搖（ヨ）」「醲郁（ノー）」（古文真宝後集）、「冢宰（チヨ）」（論語）とオ段長音の「ヨウ」「ノウ」「チョウ」を短呼したり、「翳翳（エエ）」「災青（サイセ）」

「鉼罌」（古文真宝後集）のように「エイ」「セイ」「ヘイ」を「エー」「セー」「ヘー」の短呼にしたりする現象が見られる。これは、「焉求」の「焉」を、角筆で「ナニシカ」という平安時代以来口頭語の場で使われて来た語で読んでいることと共に、毛利の殿様の当時の日常の生の発音や語彙をうかがう資料として興味深い。

明倫館旧蔵書や山根信太郎氏寄贈書・景山家文書の角筆の書入れは、江戸後期のものが主であるが、発音上、同じ現象が見られる。オ段長音の短呼には、「荘子」（景山家文書、論語）「寇」（山根氏寄贈書、易経）「郊社」「服膺」（中庸、後藤点）があり、「エイ」を「エー」と発音したものに、「嚮兪」「嚮殖」（明倫館旧蔵、春秋集註）、「濂渓」（山根氏寄贈書、寛文13年板近思録）がある。この他に、「ヒ」を「シ」と訛った「牝牛」（山根氏寄贈書、文化９年板易経）や、「シュ」を「シ」と訛った「須臾」（明倫館旧蔵、文選六臣註）や、「セ」を「シ」と訛った「沈潛」（景山家文書、中庸）もある。

山根信太郎氏寄贈の寛文13年板近思録の角筆文字には、「ショウ」を「シュウ」と発音した「大匠」という興味ある現象が見られた。これは現代の九州方言で「今日」を「キュウ」と発音する現象に通ずるもので、山口県では現代は消滅したが、江戸時代には九州方言と同じ発音の行われていたことをうかがわせる。

周防国明倫館旧蔵の十八史略には、「笑」に角筆で「ニタニ（タ）シテ」と読まれる仮名があり、当時の俗語が現われている。「遮」（天保10年板十八史略）、「踵」（安政２年板禮記）と共に当時の方言語彙の資料となろう。

角筆の文字には、規範から外れた当時の日常の口頭語が反映されるから、山口県における方言史の新資料となるのである。

何よりも、これらの角筆文献が山口県において書かれたことにより、角筆という古代の筆記具が、山口県でも日常的に使われていたという文字文化史上、重要な事実を本館蔵の角筆文献が語っているのである。このことは、山口県立図書館や山口市域の古寺院からも大量の角筆文献が発見されたことで一層裏付けられる。

［参考文献］

『角筆文献の国語学的研究』（研究篇・影印資料篇）２冊　小林芳規　1987年汲古書院刊
『角筆のみちびく世界』（中公新書）小林芳規著　1989年中央公論社刊
「角筆の世界を求めて」１～６　小林芳規（月刊誌『しにか』1991年４月号～９月号、大修館書店）

不　幸　せ　な　辞　典

『支那社會經濟大辭典』（山口經濟専門学校東亜經濟研究会編　1944年12月　大雅堂507頁

以下「彼女」という）第１巻（アーカ）が刊行されてほぼ半世紀を迎えようとしている。私は「彼女」の存在は承知していたが、未完ということもあり、一度も親しくつき合ったこともないしつき合おうともしなかった。それ故、今回の手紙が届かなければ内面に秘められた豊かな知性など知る由もなかっただろう。

「彼女」は極めて不幸な人生を歩んできた。1938年秋に生命らしきものを与えられ、何度かの流産の危機をくぐりぬけようやく出産という段階で、予定の産婆さん（改造社）が廃業、代理の産婆さんのお陰で何とかめでたく出生。出生後まもなく戦争が終結。母親（東亜経済研究所）は仮死（閉鎖され活動停止）状態に陥った。産声はあげたものの恐らくほとんど人の目に触れることもなく、可愛がってもらうことはおろかその存在すら忘れられかけたまま現在に至っていると思われる。楽しみに待っていた６人の弟妹が、時代背景と母親の健康悪化に誕生を拒まれたため、今でも１人ぼっちの寂しい生活を冷たい書棚の一角で細々と営んでいる。

そんな「彼女」に正月早々（１月10日）、思いもかけず１通のラブレターが届いた。差し出し人は静岡にお住まいのＯ氏だが、恋心を抱いたのは韓国の金氏（手紙では韓国における茶研究の第一人者と紹介されている）。

手紙の内容は茶種に関する記述部分（10項目）のコピーがほしいというものであった。文面から彼がかつて「彼女」と会われていることを容易に察することができる。

〝さっそくコピーを！〟と勇んで「彼女」を連れだってコピー機の前に立ったのだが漢字が読めない。『大漢和辞典』（諸橋轍次著　大修館書店）の世話になる。無事撮り終え簡単なメモを添えてO氏にお届けした。

この１通の手紙が、今まで無視し続けてきた「彼女」へ私の心を引き寄せた。

〝なぜ海を隔てた遠い韓国で「彼女」に目が注がれたのだろうか？〟

〝他の辞典類にはコピーを依頼された項目は掲載されていないのだろうか？〟

こんな単純な疑問から私の好奇心が意志に関係なく触角を動かし始めた。照会された10項目について『大漢和辞典』を検索してみた。驚いたことに掲載されていたのはわずか４項目。

多くの場合〝大漢和に載っていなければもう探せない〟と、他の手段での調査を私はあきらめてきた。この「常識」は見事にくつがえされた。〝大漢和神話〟が一瞬にして崩れる大変ショッキングなできごとであった。

それでは……と、範囲を拡げて「ア」のうち当然『大漢和辞典』にも掲載されていると思われる項目について、本学部大林教官のご協力をえて調査をした。結果は215項目中（ア全体の掲載項目は267）152項目は掲載されていたが63項目は見出すことが出来なかった。ヒット率は70.7％である。

これほど具体的な数値で結果が示されると「彼女」の辞典としての価値を評価しない訳にはいかない。〝中国研究になくてはならない（不適当な語彙が含まれているかも知れないが）現在でも立派に通用する辞典の１つ〟という私なりの素人結論を下した。かつての高商・経専時代に築かれた業績の大きさをここでも改めて認識させられた。

今まで何人かの研究者から「彼女」の継続刊行（詳しく調べてはいないが原稿は揃っていると思われる）を要望されたことを思い出す。たやすく出来る事業ではないとの判断から無下に断ってきた。「彼女」の内なる魅力に気付いた今はあんなつっけんどんな返答はできないだろう。むしろ〝何とか刊行したい。弟や妹をつくってやりたい〟という気持ちが大きくふくらむであろう。専門分野の研究者に「彼女」をじっくり観察していただいて、現在においてもなお有用な資料となり得るかどうかの判断を仰ぎたいとも思っている。

「彼女」に幸せな日々が一日も早く訪れることを祈りつつ……

☆第１巻の序文および凡例からみた「彼女」の容姿・頭脳・性格

１）内容語彙約２万（中項目主義）、Ｂ５版７冊で刊行予定。

２）極めて大雑把に言えば「支那百科大事典」であって、特に経済に重点をおいたものに外ならない。

３）近代（1842＝南京条約を起点）～現代を重点に収録しているが、歴史研究者の便益も考慮して関連あるものはそれ以前の時代も含めている。

４）執筆者＝山口経専、諸大学、諸専門学校、各学術研究所及至内地・在支・在満の諸権威者多数。

５）語彙豊富、解説簡明、多面的。

☆金氏から依頼された10項目

外焙　壑源茶　<u>榷茶</u>　鶴嶺茶　<u>火前茶</u>　假茶　<u>芽茶</u>　臥龍茶　<u>揀芽</u>　<u>官茶</u>

（アンダーラインは『大漢和辞典』にも掲載されているもの）

（経済学部東亜経済研究室係　大庭平四郎）

図書館ライブ③　逐次刊行物

図書館ライブも、今回で3回目となりました。第1回は整理関係、第2回は受入関係で、図書をいかに早く利用者に提供できるか、その改善に向けて整理係及び受入係の担当者が報告しています。今回は、逐次刊行物を中心に報告いたします。

逐次刊行物とは「日本目録規則」新版予備版の「目録用語の定義」によれば、「終期を予定せずに定期または不定期に継続出版され、同一の名称をかかげ、巻号、年月次の順に刊行されるもの」と一般的に解釈されています。

また、種類としては

1　雑誌
2　新聞
3　学会等の記事、議事録、報告書など
4　年鑑、統計類
5　モノグラフ　シリーズ

に分けられています。現在、本館では全資料について電算機で作業を進めており、1，2及び3については雑誌扱いとして雑誌システムで処理しています。4については図書扱いとして図書システムで処理し、資料の流れとしては受入係－整理係－閲覧係と回っています。この年鑑、統計類（白書等も含む）について、整理期間を短くする方法とし　①電算化の中での位置付け　②全国的な傾向―学術情報センター、国立国会図書館及び他大学での取扱い方法―　③本館の書庫管理　④整理作業の省力化等検討しました。

結果としましてこれらの資料については、図書の流れの中にいれるより別の流れとし、雑誌に準じて処理する方がデータ入力等において省力化され、また、より早く利用が可能になるとおもわれ、本館としては雑誌システムで処理することになりました。なお、雑誌システムに入れることにより様々な問題点もあり、これらの解決に向けて作業を進めており、この作業終了後雑誌システムでの取扱を開始する予定です。これにより、年鑑・白書・統計類・報告書等は納入後整理期間が短縮されると思います。

また、研究室への貸し出しを希望されるものは、受付処理（整理）終了後雑誌係で保管し、図書扱いの時は整理済みの図書として、研究室へ連絡していましたが、取扱い変更後は特にしませんので、適宜雑誌係で貸し出しの手続きをされるようにご協力をお願いします。

雑誌係としても、年鑑・統計類を処理するための準備、および、逐次刊行物全般について業務の見直し改善に向けて努力しているところです。

（本館雑誌係長　井関　章）

「雑誌記事索引データベース」及び「国会図書館科学技術欧文会議録データベース」

学術情報センターは、国立国会図書館の協力を得て、同図書館が作成する「雑誌記事索引データベース」の提供を受けてNACSIS－IR用に編集して、平成4年2月からサービスを開始しました。両データベースの概要は以下のとおりです。

「雑誌記事索引データベース」

本データベースは、我が国で刊行される、人文・社会科学分野、自然科学分野の学術雑誌約3,300種に掲載される論文の標題、著者名、掲載雑誌名、巻号、ページ等を収録しています。収録範囲は1984年以降のデータを収録しており、現在のデータ件数は約70万件です。データは3ケ月毎に更新される予定です。冊子体の「人文・社会編」と「科学技術編」との両方を収録しています。

「国会図書館科学技術欧文会議録データベース」

本データベースは、科学技術分野の主要協会

が主催する国際会議、各種シンポジウムの欧文会議録のうち、図書形態で刊行された会議録を国立国会図書館が収集したもので、会議録のタイトル、会議名、開催地、出版者、国立国会図書館コントロール番号、請求記号、分類記号等を収録しています。収録範囲は、1985年から、受入、整理完了したものです。現在のデータ件数は約23,000件です。データは３ケ月毎に更新される予定です。

両データベースの利用方法等については、参考係へお尋ねください。

寄贈図書

（本館）
森　茂暁（教養部助教授）
太平記の群像：軍記物語の虚構と真実　森茂暁著　　東京　角川書店　1991　（角川選書；221）

来 館 者

11月６日（水）東京工業大学図書館　２名
11月14日（木）京都大学文学部図書館　２名

日　　誌

10月２日（水）～３日（木）ダイアログシステム講習会（豊中市）
10月８日（火）～９日（水）平成３年度国立大学図書館協議会中国四国地区協議会係長会（徳島大）
10月14日（月）～18日（金）漢籍講習会（電算処理）（京大）
10月18日（金）国立大学図書館協議理事会（平成３年度第２回）（愛知県産業貿易会館）
10月22日（火）工学部分館図書・研究報告委員会
10月23日（水）山東大学学術交流代表団来館
10月29日（火）～31日（木）第32回中国四国地区大学図書館研究集会（鳥取大）
11月11日（月）～16日（金）漢籍講習会（初級）（京大）
11月25日（月）～26日（火）国立大学図書館協議会シンポジウム（関西セミナーハウス）
11月28日（木）～29日（金）第12回大学図書館研究集会（一橋大）
１月６日（月）閲覧カウンター前にフラワーボックスを設置し、入・退館者別通行路を設定
１月21日（火）第59回附属図書館運営委員会
１月22日（水）工学部分館図書・研究報告委員会
１月23日（木）第31回本館図書委員会
１月31日（金）ＩＬＬシステム全国説明会（九大）

編集・発行　山口大学附属図書館　〒753　山口市大字吉田　☎（0839)22－6111　内線788